第 64 回歴史探訪の会「世界遺産なるか百舌鳥・古市古墳群」

実施日　2018 年 9 月 19 日
場　所　堺市百舌鳥古墳群
案内人　森　尚夫

当日は秋晴れの好天で 21 号台風の残した倒木も一部残っていましたが安全に開催することができました。9 月 17 日にはイコモス（国際記念物遺跡会議）専門家が現地調査を終え、正しく世界遺産の期待高まる百舌鳥・古市古墳群、来年夏ごろの審査決定を待っています。
参加者は 25 名

【古墳時代とは】
古墳時代は、日本列島において古墳、特に前方後円墳の築造が卓越した時代を意味する。一般的に、縄文時代、弥生時代と対比して用いられる場合が多い。
古墳時代の時期区分は、古墳の成り立ちとその衰退をみると、一般的に 3 世紀半ば過ぎから 7 世紀末頃までの約 400 年間をさすことが多い。
中でも 3 世紀後半から 6 世紀末までは、前方後円墳が北は東北地方から南は九州地方で造り続けられた時代であり、前方後円墳の時代と呼ばれることもある。
西暦 266 年から 413 年にかけて中国の歴史文献に倭国の記述がなく詳細を把握出来ないため、この間は「空白の 4 世紀」と呼ばれています。

日本国家の成立を考察すれば、倭国のヤマト王権が拡大し、王権が強化統一されていった時代と考えられる。古墳時代終末期に倭国から日本国へ国名を変更した。「大和時代」の呼称はなくなっていく。
大型古墳の被葬者は階層の高くそれに伴い被葬者の間で身体特徴の違いが見られるようになる。一番わかりやすい身長で比較すると、大型古墳の被葬者は一般的に高身長でときに 170 センチ近くにには及ぶ被葬者がいた豪族の男性は 158 センチほどです。古墳時代の人骨の特徴は縄文人や弥生人の骨格に見られた骨太・頑丈が目立たなくなりました。大型古墳の被葬者はのちの日本人で一般的に顔面骨に変化があり。生活様式の変化・特に食物の硬さが減じたことに起因、また階層による生活レベルの違いが大きくなり階層性が目立つようになった。

※須恵器の生産　曲刃鎌　U 字形鋤先　鍬先が現れた。
　3 世紀初　三輪山麓（柳本古墳群）　4 世紀初　奈良盆地（佐紀古墳群）
　4 世紀後半　河内平野（百舌鳥。古市）古墳群が山～盆地～平野と移りより
　大きな古墳が築造された。
今回はその代表的な百舌鳥古墳 3 陵を巡ります。

コースは JR 上野芝―履中陵古墳―履中天皇陵展望台―大仙公園（公園内古墳）―
仁徳天皇陵古墳―昼食（ステーキハウス徳庵）－けやき通り―旧天皇貯水池―
反正天皇陵―方違神社解散

【百舌鳥古墳群とは】

　全国に 20 万基はあると言われる古墳の中で最大の仁徳陵古墳を中心とした4km 四方には、履中陵古墳（第 3 位）やニサンザイ古墳（第 8 位）など 250m を越える巨大古墳をはじめ、消滅した古墳を含め 100 基以上の古墳が集まって築かれていたことがわかっています。この古墳の集まりを、日本最古の歴史書である「日本書紀」に出てくる「百舌鳥」の地名を用いて百舌鳥古墳群と呼んでいます。

【百舌鳥古墳群の構成】

　現在の古墳群には大形前方後円墳を中心に 47 基の古墳が残りますが古地図で見ると 100 基以上の古墳が推測され、その構成をみると大型前方後円墳 8 基を含め前方後円墳 28 基、円墳が 54 基、方形墳 5 基で残りは不明です。

【百舌鳥古墳群の主要古墳について】

築造時期を主要な古墳についてみると、4 世紀の終わりごろに乳岡古墳の築造から始まり、5 世紀に入り大塚山古墳・履中陵古墳・仁徳陵古墳・反正陵古墳の順に築れた。6 世紀前半に最後の前方後円墳である平井塚古墳の築造をもって百舌鳥古墳群の造営が完了します。

【主要古墳の中で】

仁徳陵古墳や履中陵古墳などの巨大古墳は、西暦 413 年前後から西暦 502 年頃に大陸の先進的な文物と鉄を求めて海外進出し、中国南朝と交渉を持った「倭の五王」の時期に整合し、彼らが葬られた可能性のある古墳であることを示します。
またそれに次ぐ反正陵古墳などの大形前方後円墳は「倭の五王」に代表される大王に次ぐ被葬者が考えられます。
「倭の五王」 4 世紀以降朝鮮半島に進出。新羅や百済を臣従させ、高句麗と激しく戦った。5 世紀には倭の五王が中国に使者を遣わした。倭が朝鮮半島から得た鉄は、甲冑、武器、農具に、大陸からは文字（漢字）と仏教・儒教がもたらされた。ここで中国史書に倭王の記事が散見される讃・珍・済・興・武と続いて日本書紀の天皇と比定、武の雄略天皇か

【仁徳天皇について】

「古事記」「日本書紀」で第 16 代天皇と伝え（但し、江戸時代後期から明治時代には神功皇后が第 15 代天皇に即位したとして第 17 代天皇となっています）本名は大鶴鶴（おおさざき）大王で、仁徳天皇は 8 世紀頃につけられたおくり名です。「日本書紀」ではなくなった年齢は書いていませんが、在位 87 年で没した、略年譜では神功 57 年（257 年）に誕生、仁徳元年（313 年）1 月 3 日に即位、仁徳 87 年（399 年）に崩御され、単純計算で 143 年の長寿で亡くなったことになります。「古事記」では 83 歳で亡くなったと記されています。

父は応神天皇、母は仲姫（なかつひめ）で異母弟の皇太子・（うじのわきいらつこ）皇子を助け、異母兄の（おおやまもり）皇子を退け、皇太子と皇位を譲りあいますが、

皇太子の自殺により即位します。
　都を難波高津宮（なにわのたかつのみや）に定めて葛城磐之媛（かつらぎのいわのひめ）を皇后として、のちの履中・反正・允恭天皇をもうけます。
一般には民家から炊事の煙が立ちのぼらないのを見て、民の困窮を察し課役を 3 年間免除し、難波の堀江・感玖（こむく）大溝・堤・などの築造や屯倉（みやけ）の設置など行ったという伝承をもち、聖帝（ひじりのみかど）とたたえられ、古来より理想的な天皇像とされています。

「百姓富めるは則ち朕が富めるなり」　　仁徳天皇
「高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」　　新古今和歌集
　ご慈悲を偲んで詠んだ歌

【履中天皇ついて】

第 17 代天皇（いざほわけのみこと）仁徳天皇の弟一皇子
皇后には黒媛、住吉仲皇子との争い、このころには平群（つく）・蘇我（まち）・物部（いこふつ）の名が出てくることに注目したい、これらを国政に参画させた。
諸国に国史（ふみひと）と呼ばれる書記官を設置し国内の情勢を報告させた。
「書紀」には 70 歳「古事記」に 64 歳崩御とある。

【反正天皇について】

　第 18 代天皇、名は（たじひのみずはわけのみこと）仁徳天皇の第三皇子
目立った業績はないが兄の履中天皇が太子の時、仁徳天皇が没し、住吉仲皇子の乱が起こるとこれを平定した。倭の五王の一人、珍をこの天皇に比定する説がある。